

## 旧国名に最も愛着を持っているのは何県の人？



国名を、もし県名に改めたとしたらどうなるか。阿波踊りは「徳島踊り」、讃岐うどんは「香川うどん」、越前ガニは「福井ガニ」、薩摩揚げは「鹿児島揚げ」などというように、それこそ味も素っ気もない名前になってしまう。

それはともかく、何県の人か旧国名に最も愛着を持っているのだろうか。まず地名を見てみると、静岡県東部の旧国名の「伊豆」が自治体名として最も多く使われており、伊豆市、伊豆の国市、東伊豆町、西伊豆町、南伊豆町、伊

予」のつく鉄道駅が「伊予三島」、「伊予西条」、「伊予市」など二十八駅もあり、紀伊(二十五駅)、越後(二十三駅)、陸前及び武蔵(二十二駅)を押さえて、鉄道駅の部門では「伊予」が日本一を誇っている。だが鉄道駅の場合、他の駅と区別するために旧国名を冠しているという事情もある。しかし、旧国名を冠した駅がほとんどない県も少なくないのだから、やはり愛媛県など旧国名を冠した駅が多い県の人には、旧国名に格別の思い入れがあるのだろう。

旧国名のブランド力では、「讃岐」が日本一の座を獲得している。総合調査会社の日経リサーチが十六歳から六十九歳までの男女を対象に、インターネットで実施した「地域ブランド力調査」の旧国名部門では、琉球王国を別にすると「讃岐」が日本一で、二位が「伊勢」、三位「信州」、四位「薩摩」という順位になっている(二〇〇八年度)。讃岐うどんのブランド力が大きくものをいっているようだ。香川県がどこにある県なのかを知らない人でも、讃岐が四国にあることは知っている。それほど知名度の高さである。「石見」や「伯耆」などのように余り馴染みのない旧国名がある一方で、「伊勢」や「出雲」などのように県名よりブランド力の高い旧国名もある。

いずれにしても、新しい物がり屋の日本人が、千年以上前に生まれた旧国名にいつまでも誇りと愛着を持っていることは大変喜ばしいことではないかと思う。

古代律令国家の成立以来、千年以上続いた行政区分の五畿七道、すなわち飛騨、土佐、薩摩などという旧国名は、江戸幕府が崩壊して明治新政府が樹立されたことにより、「県」という新しい行政単位に生まれ変わった。それから約百四十年、行政区分としてはほとんどに消滅している旧国名だが、いまだに旧国名への愛着は根強く、郷土料理や伝統工芸品などはもちろん、自治体名や店の屋号にも旧国名が好んで使われている。旧国名には郷愁を感じさせる独特の響きがあるのか、それとも脈々と受け継がれてきた伝統を守っているという、日本人の文化を重んじる心の表れなのか。伝統行事や名産品などに冠された旧

東市(伊豆の東の意)の六市町もある。次いで島根県東部の旧国名「出雲」(出雲市、雲南市、東出雲町、奥出雲町)、大阪府南西部の旧国名「和泉」(和泉市、泉佐野市、泉大津市、泉南市)、高知県の旧国名「土佐」(土佐市、土佐清水市、土佐町、中土佐町)が四市町村で伊豆に次ぐ多さだ。だが平成の大合併前までは、高知県にはこのほか土佐山田町、西土佐村、土佐山村が存在しており、合計七市町村もの「土佐」があった。このほかにも全国には旧国名を使った市町村が多く、日本人がいかに旧国名に愛着を持っているかが分かる。

では、鉄道駅ではどの旧国名が最も多く使われているのか。愛媛県の旧国名である「伊